

先月までの為替相場のレビューと、  
今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2014/06/02

## ECB理事会が焦点に

通貨ペア	基調		ページ数
<a href="#">ユーロ/円</a>	➡	<b>ECBの金融政策が焦点</b>	2-3
		予想レンジ: 136.500~143.500円	
<a href="#">ユーロ/ドル</a>	➡	<b>ユーロ安からドル高へ</b>	4-5
		予想レンジ: 1.34000~1.38000ドル	
<a href="#">ポンド/円</a>	➡	<b>日銀の「追加緩和」に対する姿勢に注意</b>	6-7
		予想レンジ: 167.000 ~ 175.000 円	
<a href="#">ポンド/ドル</a>	➡	<b>MPC議事録に注目</b>	8-9
		予想レンジ: 1.63000 ~ 1.71000 ドル	

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



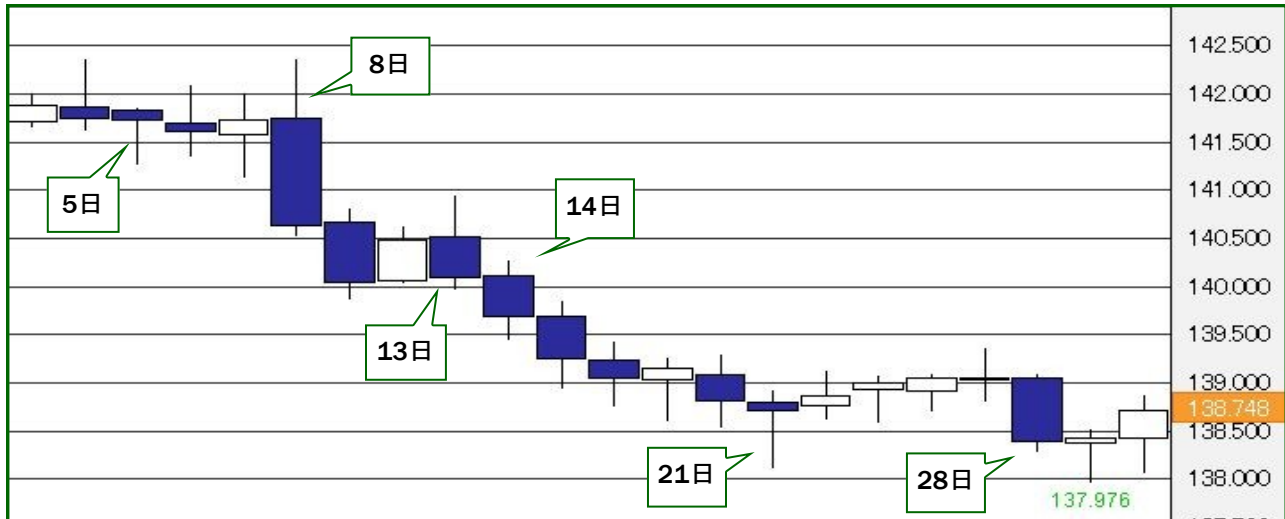
本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2014 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

## EUR/JPY

## ユーロ/円 5月の推移

	始値	高値	安値	終値
四本値	141.713円	142.359円	137.976円	138.724円



5日	東京市場がこどもの日の祝日で閉散とする中、中国4月HSBC製造業PMI・改定値が48.1と速報値(48.4)から下方修正された事をきっかけにリスク回避ムードが広がった。欧州市場に入り、独DAX指数が下落すると141.20円台まで下落したが、NY市場では、米4月ISM非製造業景況指数が予想を上回った事を好感してNYダウ平均が反発。リスク回避ムードが和らぐと141.70円台まで値を戻した。
8日	欧州中銀(ECB)は定例理事会を開き金融政策の現状維持を発表した。その後の会見の冒頭でドラギ総裁が「必要であれば迅速に行動する用意がある」などと従来どおりの発言を繰り返すと、ユーロ買いが活発化し、142.30円台へ上昇した。ところが、同総裁が「次回6月に行動するのはやぶさかではない」と続けると一転して下落。さらに「ユーロ相場のインフレへの影響は重大な懸念」「為替を巡る懸念に対応する必要がある」などとユーロ高阻止の姿勢を表明した事から140.533円まで大きく下落した。
13日	独5月ZEW景況感調査が33.1と予想(40.0)を大幅に下回るとユーロ売りが活発化。一部報道にて「独連銀は必要であれば中銀預金金利のマイナス化やパッケージ化された銀行融資債券の買入れを支持する」と伝わった事もユーロ売りを誘った。ただ、心理的節目の140.00円前後では押し目買いも散見されたため底堅く推移した。
14日	一部報道で「ECBは6月の理事会で、全3種類の金利引き下げを含む政策措置を準備」「ECBの利下げは条件付の長期(資金供給)オペあるいは資産担保証券(ABS)買入れで補完」などとするECB関係筋の見解が伝わると140円を明確に割り込んだ。
21日	日銀が金融政策の現状維持を発表し、その声明文中から「デフレ」の文字が削除された。また、その後の会見で黒田総裁は、物価と景気の見通しに改めて自信を示した。追加緩和への期待が剥落する形で円が買われると138円台前半まで下落。しかし、その後はNYダウ平均が150ドル超上昇する中で138.70円台まで値を戻した。
28日	独5月雇用統計で、失業者数が2.4万人増と予想(1.5万人減)外の増加となった(失業率は予想通りの6.7%)事や、メルシュECB専務理事が「次回のECB理事会では複数の措置を打ち出す可能性がある」などと発言した事からユーロが下落。月末需要と見られる独国債買い(利回りは低下)が入った事もユーロの重石となり、138.300円まで下落した。

## EUR/JPY

## 今月のポイント

5月のユーロ/円相場は137.976円～142.359円のレンジで推移し、月間の終値ベースでは約2.1%の下落（ユーロ安・円高）となった。8日のドラギ総裁会見をきっかけに欧州中銀（ECB）の追加緩和観測が急浮上した一方、21日の黒田総裁会見を受けて日銀の追加緩和観測が後退したことから、ユーロ安・円高が進んだ格好だ。ウクライナ暫定政府軍と親ロシア派の戦闘激化や、欧州議会選挙における反ユーロ派政党の躍進などといった重大な出来事もあったが、これらについてはユーロ相場に直接的な反応は見られなかった。それだけ、ECBの追加緩和に市場の関心が集中したという事でもあろう。

当然、6月5日のECB理事会が最大の焦点となるが、この1カ月間の要人発言などから主要政策金利の小幅な引き下げ（中銀預金金利のマイナス化も含む）は、ほぼ織り込み済みだ。その意味では、ECBが量的緩和の領域に踏み込めるか否かがカギとなり、ユーロ続落へのハードルはかなり高いと見ておくべきだろう。万が一ECBが追加緩和を見送った場合や、小幅な利下げのみに留めた場合は、ユーロの買戻しが活発化する可能性がある。ただし、ドラギ総裁が次回以降の量的緩和導入を強く示唆するなど「口先緩和」を行えば、再びユーロ安に振れる事も考えられる。いずれにしても、このECB理事会を挟んである程度の乱高下は避けられない公算であり、当面のユーロ相場の流れを左右する可能性もあるため要注目だろう。（神田）

（予想レンジ：136.500～143.500円）

## 今月の注目材料

※発表日時は予告なく変更される場合があります。※予定一覧は信頼性の高いと思われる情報を元にまとめておりますが、内容の正確性を保証するものではありませんので事前にご留意くださいますようお願いいたします。

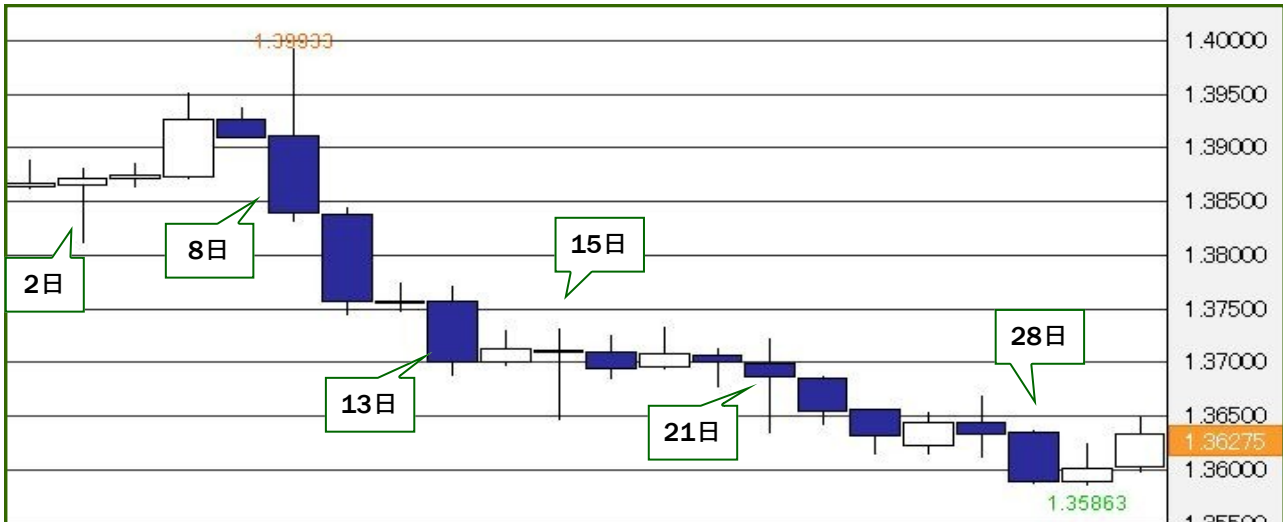
日付	経済指標、イベント等	日付	経済指標、イベント等
6/2(月)	5月独消費者物価指数・速報	6/13(金)	日銀金融政策決定会合（12日～発表）
6/3(火)	4月ユーロ圏失業率		5月中国鉱工業生産
6/4(水)	4月ユーロ圏生産者物価指数	6/17(火)	6月独ZEW景況感調査
	1-3月期ユーロ圏GDP・改定値	6/18(水)	5月日本通関ベース貿易収支
6/5(木)	4月ユーロ圏小売売上高		米FOMC政策金利発表
	欧州中銀金融政策発表	6/20(金)	6月ユーロ圏消費者信頼感・速報
6/6(金)	4月独鉱工業生産	6/23(月)	6月中国HSBC製造業PMI
	5月米雇用統計		6月独PMI製造業/サービス業・速報
6/8(日)	5月中国貿易収支		6月ユーロ圏PMI製造業/サービス業・速報
6/9(月)	4月日本経常収支・貿易収支	6/24(火)	6月独IFO景況指数
	1-3月期日本GDP・二次速報	6/27(金)	5月日本消費者物価指数
6/12(木)	5月仏消費者物価指数		6月独消費者物価指数・速報
	ECB月例報告		

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

# EUR/USD

## ユーロ/ドル 5月の推移

	始値	高値	安値	終値
四本値	1.38643ドル	1.39933ドル	1.35863ドル	1.36346ドル



2日	米4月雇用統計は失業率が6.3%に低下(前月6.7%)し、非農業部門雇用者数は前月比28.8万人増となった。予想(6.6%、21.8万人増)よりも大幅に良好な結果となり、ドル買いが強まると1.3810ドル台へ急落した。しかし、労働参加率が過去最低水準に並ぶ62.8%に低下した他、平均時給が前月比横ばいに留まるなど、内容的には強さが感じられなかった事から急速にドル売りに転じ、1.3880ドル台まで反発した。
8日	欧州中銀(ECB)は定例理事会を開き金融政策の現状維持を発表した。その後の会見の冒頭でドラギ総裁が「必要であれば迅速に行動する用意がある」などと従来どおりの発言を繰り返すと、ユーロ買いが活発化し、1.39933ドルへ急上昇した。ところが、同総裁が「次回6月に行動するのはやぶさかではない」と続けると一転して下落。さらに「ユーロ相場のインフレへの影響は重大な懸念」「為替を巡る懸念に対応する必要がある」などとユーロ高阻止の姿勢を表明した事から1.38330ドルまで大きく下落した。
13日	独5月ZEW景況感調査が33.1と予想(40.0)を大幅に下回るとユーロ売りが活発化。一部報道にて「独連銀は必要であれば中銀預金金利のマイナス化やパッケージ化された銀行融資債券の買入れを支持する」と伝わった事もユーロ売りを誘い、一時1.37ドルを割り込んだ。
15日	コンスタンシオECB副総裁が「さらなる金融緩和を排除しない」と述べた他、イタリア第1四半期国内総生産(GDP)が前期比-0.1%と予想(+0.2%)外の減少となった事などからユーロに売り圧力がかかった。さらに、米週次新規失業保険申請件数が29.7万件と予想(32.0万件)よりも大幅に良好な結果となりドル買いが強まった事もユーロ/ドルを押し下げた。しかし、その後「ロシア中銀は昨年、外貨準備におけるドルの割合を減らし、ユーロの割合を増やした」と報じられた事などからユーロを買い戻す動きが強まり1.37ドル台を回復した。
21日	日銀の追加緩和に対する期待が剥落した事によるユーロ/円の下げにつれて1.37ドルを割り込んだ。その後、「数年内にインフレ率が(目標の)2%になると多くの参加者が予想」「金利正常化の手段について協議した」などとする米連邦公開市場委員会(FOMC)議事録が公開されるとドル高に振れて1.3650ドル前後まで下落した。
28日	独5月雇用統計で、失業者数が2.4万人増と予想(1.5万人減)外の増加となった(失業率は予想通りの6.7%)事や、メルシュECB専務理事が「次回のECB理事会では複数の措置を打ち出す可能性がある」などと発言した事からユーロが下落。月末需要と見られる独国債買い(利回りは低下)が入った事もユーロの重石となり、一時1.36ドルを割り込んだ。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

# EUR/USD

## 今月のポイント

5月のユーロ/ドル相場は1.35863ドル～1.39933ドルのレンジで推移し、月間の終値ベースで約1.7%の下落(ユーロ安・ドル高)となった。月初こそ、米4月雇用統計の結果などから米国の早期利上げ観測がやや後退する形でドルが下落すると1.40ドル目前まで上昇したが、欧州中銀(ECB)のドラギ総裁が6月の追加緩和を強く示唆した事でユーロ安が進行した。ドルとユーロの弱さ比べとなった格好だが、通貨の売り材料として「追加緩和観測」が、「利上げ先送り観測」よりも強いのは当然とばかりにユーロ売りが勝った格好だ。また、下旬には、ドルが持ち直す動きをみせた事で一時1.36ドルを割り込むなど、ユーロ/ドル相場はほぼ1カ月を通して軟調に推移した。

5月のユーロ安の決め手となったECBの追加緩和は6月5日の理事会で当面の決着が着くと見られるが、マイナスの預金金利を含む小幅な利下げは既に市場が織り込んでいる可能性が高く、量的緩和の導入もしくは近い将来に導入するとの強い示唆がなければユーロが買い戻される展開も十分にあり得る。ユーロ安が継続するためのハードルはそれなりに高いと見ておくべきだろう。もっとも、ドル高が主導してユーロが続落するという展開は想定可能だろう。米10年債利回りは、5月末時点で2.47%前後と約半年振りの低水準にあるが、来年中には利上げ開始が見込まれる中で、これ以上の低下余地は乏しいと考えられるためだ。6日の米5月雇用統計などの経済指標が良好な内容となれば、米長期金利の上昇とともにドル高が進みやすい地合いとなろう。5月の反動から、ユーロ高とドル高の強さ比べになる事も考えられるが、通貨の買い材料としては「利上げ開始期待」の方が格上のためドル高に軍配が上がりそうだ。(神田)

(予想レンジ:1.34000ドル～1.38000ドル)

## 今月の注目材料

※発表日時は予告なく変更される場合があります。※予定一覧は信頼性の高いと思われる情報を元にまとめておりますが、内容の正確性を保証するものではありませんので事前にご留意くださいますようお願いいたします。

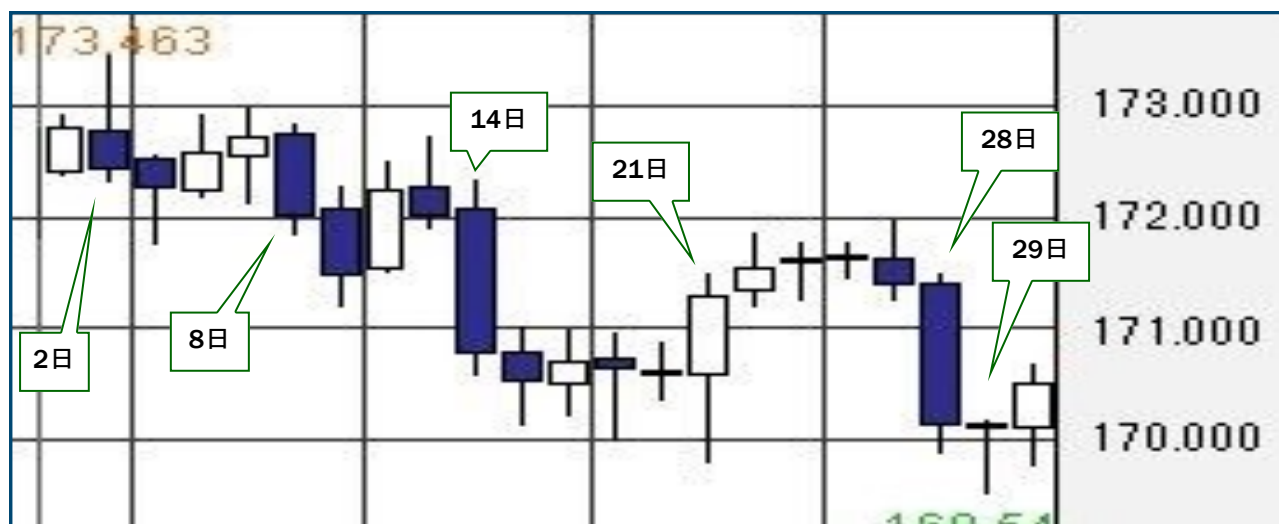
日付	経済指標、イベント等	日付	経済指標、イベント等
6/2(月)	5月独消費者物価指数・速報	6/16(月)	5月米鉱工業生産
	5月米ISM製造業景況指数	6/17(火)	6月独・ユーロ圏ZEW景況感調査
6/3(火)	4月ユーロ圏失業率		5月米消費者物価指数
6/4(水)	5月米ADP全国雇用者数		5月米住宅着工件数
	5月米ISM非製造業景況指数	6/18(水)	米FOMC政策金利発表
6/5(木)	4月ユーロ圏小売売上高	6/20(金)	6月ユーロ圏消費者信頼感・速報
	欧州中銀金融政策発表	6/23(月)	6月中国HSBC製造業PMI
6/6(金)	4月独鉱工業生産		6月独PMI製造業/サービス業・速報
	5月米雇用統計		6月ユーロ圏PMI製造業/サービス業・速報
6/8(日)	5月中国貿易収支	6/24(火)	6月独IFO景況指数
6/12(木)	5月仏消費者物価指数		6月米消費者信頼感指数
	5月米小売売上高	6/25(水)	5月米耐久財受注
6/13(金)	5月中国鉱工業生産	6/27(金)	6月独消費者物価指数・速報
	4月ユーロ圏貿易収支	6/30(月)	5月米中古住宅販売成約

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

## GBP/JPY

## ポンド/円 5月の推移

	始値	高値	安値	終値
四本値	172.439円	173.463円	169.543円	170.532円



2日	米4月雇用統計の良好な結果を受けて、ドル/円が上昇すると、ポンド/円は173.463円の高値を付けた。ただ、その後にNYダウ平均が失速したことを受けてポンド/円も反落した。
8日	英中銀(BOE)は市場予想通り金融政策を据え置いた。これに対するポンドの反応は限定的。しかし、欧州中銀(ECB)のドラギ総裁が記者会見で追加緩和について強い示唆をすることがなかったことから、ユーロ/円が失速すると、ポンド/円も軟化した。
14日	英4月雇用統計は失業率が3.3%(予想3.3%)、失業保険申請件数が-2.51万件(同-3.00万件)、1-3月ILO失業率が6.8%(同6.8%)と言う結果で、発表直後のポンドは小幅に下落。さらに、同時に発表されたBOEの四半期インフレ報告において、失業率の見通しが2年で5.9%(2月6.4%)、3年間で6.0-6.5%(変わらず)、GDP見通しが2014年+3.4%(変わらず)、2015年+2.9%(2月+2.7%)、2016年+2.8%(変わらず)、インフレ見通しは2年で+1.9%(変わらず)と示された。事前に2014年のGDP見通しの上方修正期待があったものの、これが据え置かれた上、さらにカーニーBOE総裁が記者会見で利上げペースは緩やかになることを強調すると、ポンドは失速した。
21日	黒田日銀総裁の定例記者会見で追加緩和についての前向きな示唆がなかったことから、会見中から円買いが強まり、ポンド/円は下落。その後、英4月小売売上高は前月比+1.8%(除自動車、予想:+0.5%)と予想を大幅に上回った上、前回分が上方修正(前月:-0.4%→+0.1%)されたことを好感してポンドは上昇。さらに、英金融政策委員会(MPC)議事録において「穏やかな利上げとなるものの、その時期の前倒しが必要となるかもしれない」などとの記述があった点もポンド高に寄与した。
28日	米長期金利の低下を受けてドル/円が大幅に下落すると、ポンド/円も連れ安した。
29日	米第1四半期国内総生産(GDP)・改定値が前期比年率-1.0%と市場予想(-0.5%)を下回ったことから、発表直後のドル/円が下ブレするとポンド/円も連れ安したが、同時発表の米新規失業保険申請件数が30.0万件と予想(31.8万件)よりも強い結果だったことなどもあってドル/円がすぐに反発したため、ポンド/円も下げ幅を圧縮した。

## GBP / JPY

## 今月のポイント

5月のポンド/円相場は169.543円～173.463円のレンジで推移し、月間の終値ベースでは約1.1%の下落（ポンド安・円高）となった。

5月のポンド/円は欧州中銀（ECB）の6月利下げ観測によるユーロ/円の下げに連れ安する場面が目立った。ただ、14日に発表された英中銀（BOE）のインフレ報告は「景気見通しは2月のインフレ報告からあまり変化がない。英経済はノーマルなレベルに向かって動き出したばかりだ」「英国の景気回復は、他の地域と比較して、早く強いものとなったため、ポンドが強くなった」と、市場が思っていたよりもハト派的であると判断されてポンドを下押す場面もあった。もっとも、21日発表のBOEの金融政策委員会（MPC）議事録では利上げについて「穏やかな利上げとなるものの、その時期の前倒しが必要となるかもしれない」と、早期利上げの可能性を指摘する文言もあり、これがポンドを下支える場面もあった。

6月は日英両国の金融政策の先行きについての思惑が鍵になりそうだ。

英国の金融政策については当面は据え置きの方針が大きいと見られるため、MPCの際は引き続きあまりポンドが動かない可能性が高い。ただし、利上げ時期を織り込む上で議事録の内容は注目されるだろう。また、日本の金融政策についても注視すべきだろう。市場関係者の間では「7月追加緩和説」が大勢を占めているが、それが実現されるには、6月の日銀政策決定会合で「追加緩和が必要になった可能性があることを指摘する」という儀式が必要になると見る。これがあれば、7月緩和期待が一気に盛り上がり、ポンド/円を押し上げる圧力になると考えられる。ただし、一方で黒田総裁が何ら示唆しない場合は、7月緩和観測後退で円高が大きく進む可能性もある。（石川）

（予想レンジ：167.000～175.000円）

## 今月の注目材料

※発表日時は予告なく変更される場合があります。※予定一覧は信頼性の高いと思われる情報を元にまとめておりますが、内容の正確性を保証するものではありませんので事前にご留意くださいますようお願いいたします。

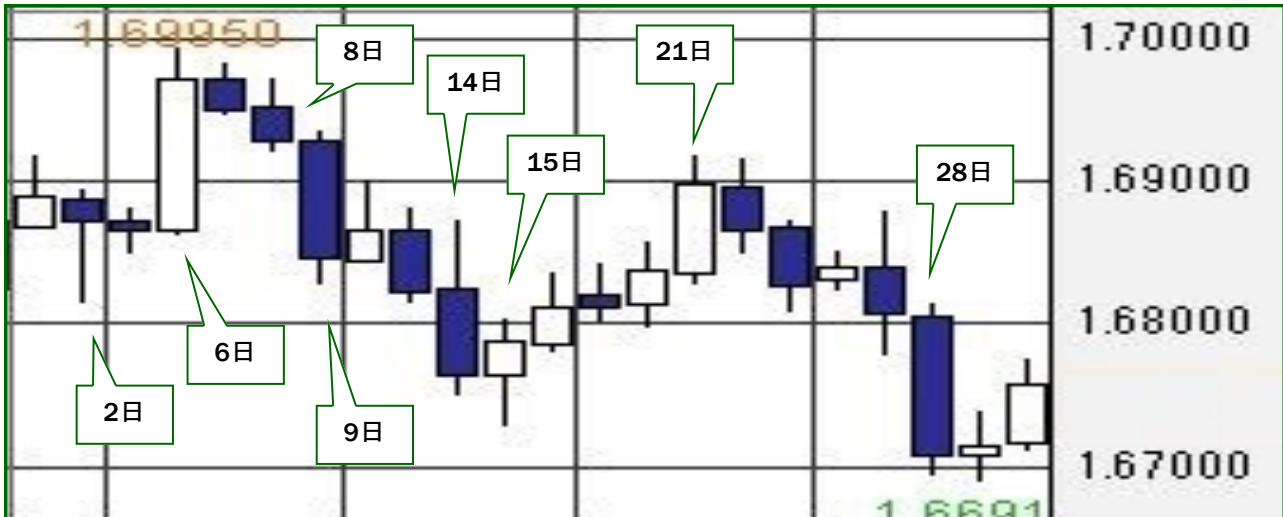
日付	経済指標、イベント等	日付	経済指標、イベント等
6/2(月)	5月英PMI製造業	6/13(金)	日銀金融政策決定会合(12日～発表)
6/3(火)	5月英PMI建設業	6/17(火)	5月英消費者物価指数
6/4(水)	5月英PMIサービス業	6/18(水)	日銀金融政策決定会合議事要旨 (5月20日・21日分)
6/5(木)	BOE政策金利発表		5月日本通関ベース貿易収支
6/6(金)	4月英商品貿易収支		BOE議事録
	5月米雇用統計		米FOMC政策金利発表
6/9(月)	4月日本経常収支・貿易収支	6/19(木)	5月英小売売上高指数
	1-3月期日本GDP・二次速報		6月米フィラデルフィア連銀景況指数
6/10(火)	4月英鉱工業生産	6/27(金)	5月日本消費者物価指数
6/11(水)	5月英雇用統計		第1四半期英GDP・確報値
6/12(木)	4月日本機械受注		
	5月米小売売上高		

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

# GBP/USD

## ポンド/ドル 5月の推移

	始値	高値	安値	終値
四本値	1.68701ドル	1.69950ドル	1.66916ドル	1.67594ドル



2日	米4月雇用統計の良好な結果を受けてポンド/ドルは一旦下落。ただ、その後にNYダウ平均が失速したことから米長期金利が低下すると、ドル売りが強まり、ポンド/ドルは下げ幅を圧縮した。
6日	スペイン4月サービス業PMIなど欧州指標の好結果を受けてユーロ/ドルが上昇したこと、英4月サービス業PMIが58.7と予想(57.8)よりも強かったことを受けてポンド/ドルは1.69950ドルの高値を付けた。
8日	英中銀(BOE)は市場予想通り金融政策の据え置きを決定。これを受けたポンドの反応は限定的だった。しかし、欧州中銀(ECB)のドラギ総裁が記者会見で追加緩和について強い示唆をすることがなかったことから、ユーロ/ドルが失速すると、ポンド/ドルも軟化した。
9日	ECBの6月利下げ観測が拡がる中でユーロ/ドルが一段と値を下げると、ポンド/ドルも連れ安した。
14日	英4月雇用統計は失業率が3.3%(予想3.3%)、失業保険申請件数が-2.51万件(同-3.00万件)、1-3月ILO失業率が6.8%(同6.8%)と言う結果で、発表直後のポンドは小幅に下落。さらに、同時に発表されたBOEの四半期インフレ報告において、失業率の見通しが2年で5.9%(2月6.4%)、3年間で6.0-6.5%(変わらず)、GDP見通しが2014年+3.4%(変わらず)、2015年+2.9%(2月+2.7%)、2016年+2.8%(変わらず)、インフレ見通しは2年で+1.9%(変わらず)と示された。事前に2014年GDP見通しの上方修正期待があったものの、これが据え置かれた上、さらにカーニーBOE総裁が記者会見で利上げペースは緩やかになることを強調すると、ポンドは失速した。
15日	欧州中銀(ECB)のコンスタンシオ副総裁の「さらなる金融緩和を排除しない」との発言や、伊第1四半期GDP・速報値が前期比-0.1%と予想(+0.2%)外の減少となった事などからユーロ/ドルが下げるとポンド/ドルも下落。しかし、「ロシア中銀は昨年、外貨準備におけるドルの割合を減らし、ユーロの割合を増やした」と報じられユーロ/ドルが反発したことや、米4月鉱工業生産が前月比-0.6%と予想(±0.0%)外に低下したことを受けたドル売りによって、ポンド/ドルは反発した。
21日	英4月小売売上高が前月比+1.8%(除自動車、予想:+0.5%)予想を大幅に上回り、前回分が上方修正(前月:-0.4%→+0.1%)されたことを好感してポンドは上昇。さらに、英金融政策委員会(MPC)議事録において「穏やかな利上げとなるものの、時期の前倒しが必要となるかもしれない」などの記述があった点もポンド高に寄与し、1.69199ドルまで上昇した。ただ、その後は頭が重く、米連邦公開市場委員会(FOMC)議事録で「雇用を促進してもインフレリスクはないと判断」「数年以内にインフレ率が2%になると多くの参加者が予想」などの記述を受けて米長期金利が上昇すると、ポンド/ドルは上げ幅を縮小した。
28日	アジア市場中から全般的にドル買いの流れの中でポンド/ドルは下落した。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。



# GBP / USD

## 今月のポイント

5月のポンド/ドル相場は1.66916ドル～1.69950ドルのレンジで推移し、月間の終値ベースでは約0.7%の下落(ポンド安・ドル高)となった。

この月のポンド/ドルは、欧州中銀(ECB)の6月追加緩和観測から軟調だったユーロ/ドルに押されて全般的に軟調だった。ただ、英国の経済指標については、好結果への期待が強く、発表前にポンドが上昇し、実際の結果が市場予想以下だった場合に売りに転じる様子が散見されたほか、インフレ報告がハト派的であると判断されてポンドが下落するなど、英国の好景気と早期利上げについての過度な期待が掛かっている様子も見受けられた。

6月はまず、ECBの追加緩和が実施されるかどうかのポイントとなる。5月のポンドが下げた背景として「英国の早期利上げについての前のめりな期待剥落」というポンド売り要因があったことも確かだが、一番大きかったのは「ユーロ/ドルの下げを受けた連れ安」という面だろう。ECB理事会で追加緩和という材料が一服し、ユーロ/ドルに底打ち感が出れば、ポンド/ドルにかかる下向きの圧力は緩和されると考えられる。

また、英国について、5月のインフレ報告はハト派的であると判断されたが、MPC議事録については利上げ時期前倒しの可能性も指摘されるなど、英中銀のスタンスはそこまでハト派寄りではなかったことが明らかになった。この後も経済指標が好調なら、改めてポンドに買い圧力が掛かる可能性がある。なお、米国については、引き続き金融政策についてのヒントがFOMCから出てくる可能性は低い。ひとつひとつの指標結果を確認しながら、慎重に米経済の強さを確認していく流れになると見る。従ってドル主導の動きは期待しづらいと考える。(石川)

(予想レンジ:1.63000～1.71000ドル)

## 今月の注目材料

※発表日時は予告なく変更される場合があります。※予定一覧は信頼性の高いと思われる情報を元にまとめておりますが、内容の正確性を保証するものではありませんので事前にご留意くださいますようお願いいたします。

日付	経済指標、イベント等	日付	経済指標、イベント等
6/2(月)	5月英PMI製造業	6/17(火)	5月英消費者物価指数
	5月米ISM製造業景況指数		5月米消費者物価指数
6/3(火)	5月英PMI建設業		5月米住宅着工件数
6/4(水)	5月英PMIサービス業	6/18(水)	BOE議事録
	5月米ISM非製造業景況指数		米FOMC政策金利発表
6/5(木)	BOE政策金利発表	6/19(木)	5月英小売売上高指数
6/6(金)	4月英商品貿易収支		6月米フィラデルフィア連銀景況指数
	5月米雇用統計	6/24(火)	6月米消費者信頼感指数
6/10(火)	4月英鉱工業生産		5月米新築住宅販売件数
6/11(水)	5月英雇用統計	6/25(水)	5月米耐久財受注
6/12(木)	5月米小売売上高		第1四半期米GDP・確報値
6/13(金)	6月米ミシガン大消費者信頼感指数・速報値	6/27(金)	第1四半期英GDP・確報値
6/16(月)	5月米鉱工業生産	6/30(月)	6月米シカゴ購買部協会景気指数

巻頭の特記事項を必ずお読みください。